
どうか貴方は変わらずに、 【イナズマイレブン】

李兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうか貴方は変わらずに、 【イナズマイレブン】

【Nコード】

N0111U

【作者名】

李兎

【あらすじ】

その少女の来訪が、自分が傷つけ奪ったモノの儂さを知ることになるきっかけだった。罪を犯したが許された少年と、傷つきながら戦ったそのせいで”大切なモノ”を奪われた少女の、短くてちょっぴり寂しいお話。

(前書き)

李兔がこのサイト様で初めて書くものです。所謂テスト投稿？なのでガツカリクオリティ間違い無し。

誤字脱字無法地帯なので、発見した場合は一言くださると嬉しいです^^

今回のCPは風塔。やめてそんな目で見ないで。なぜノマカプにしたかは自分でも謎。でもこの二人は普通に可愛いと思う。

それは、あまりにも突然すぎる出来事だった。

普段と何一つ変わらぬ部活中。照りつく陽射しに鬱陶しさを感じつつも、ただひたすらボールを蹴った。この行為にさえ劣等感を抱いたあの日を拭おうとするかのように。俺を信じてくれて、頑張れって励ましてくれて、結局裏切ってしまった俺をまた、”仲間”だって言ってくれたアイツに少しでも追いつきたくて。どんなに走っても追いつけないことはわかっていた。もはや自分が走れないことも、気付いていた。けれどそんなことを言ったらアイツはまた心配するだろうから。怯えを孕んだ人懐っこい瞳で、俺をここに食い止めようとするから。そんなことはもう、目に見えている。だから俺は心配させないように。また、何も考えずにサッカーボールを蹴られるようになるまで、遠くは無いであろうその日がやってくるまで、ずっと己の罪を謝罪し続けよう。言葉ではもう伝わらないから。謝ると逆に頭を下げられるから。自分の行動で届けるよ。ごめん、と。もう大丈夫だから、泣かないから、お前は今まで通りに、サッカーを愛してくれ、と。俺はもう、サッカーを憎んじやいないから。

そんな思いもあり、無我夢中で走り続けていた俺。だからこそ、背に太陽をつけ堂々と佇む彼女の姿を見つけたとき、不意に名前を呼んでしまったのだ。たった数週間、離れていただけの少女の名前を。俺よりも勇ましく、カッコよくて、そしてやっぱり脆い彼女を。脳内で名前の響きを確かめるよりも先に、懐かしさ募るソイツの名前を。聴こえないくらい小さな呟きで。

突然すぎる再会の、首謀者を。

「久しぶりだな、皆！ 楽しそうじゃんか！」

「……塔、子？」

呆然と立ち竦む俺達に、ニイッと笑いかけた塔子。口角を吊り上げたような悪戯っぽい笑い方をする時は、大抵よからぬことを考えているのだから。作戦大成功、と言わんばかりに誇らしげに、優越感に満ちた瞳を見て眉間にしわが寄るのが自分でもわかった。

ばつちりと着こなされた黒いスーツは、初めて出会ったあの日以来で。でもやっぱり雷門ユニで過ごした時間のほうが長いわけだから、違和感を覚える。円堂もそう感じたのか「似合わない」と指摘すると、「あたしもそう思う！」と清々するほど気持ちよく言い切ってくれた。本当、女の子らしくない。改めてそう感じたが、本人に言うとは激怒されるので心にそっと留めておいた。俺と塔子じゃ、口喧嘩の行く末なんて目に見えている。

「遊びに来てくれるなら、連絡の一つくらい寄こしたらどうだ？」

呆れ気味の鬼道を横目に塔子は、まーまー気にすんな！ と満面の笑みを浮かべる。鬼道の意見には同感だ。せつかく遊びに来るなら、それなりのもてなしの仕方がある。こう突然来られては迷惑、とまではいかないものの逆に落ち着いて練習ができなくなってしまうから困るのだ。とは言っても、あの塔子のことだ。きっと練習には混ざるのだろう。曖昧な推測を立てうんうん、と頷く。木野さんに変な目で見られたのは気のせいだ。

「練習があるから、歓迎パーティーも何もできないけど……」

「あ、そこら辺は気にしないで。あんまり長居しないって、パパと約束してるんだ」

練習見て、少ししたら帰るよ。

そう告げる彼女の瞳が、酷く寒々しそうに見えたのは俺の目の錯覚だろうか？

どうしても、気になる。

俺の知る”財前塔子”^{さいぜんとうし}という存在は、たとえスカートを履いていようと周りの視線など気にせず駆け回る人間で。お風呂も男女の恥じらいなんて見えていないようで。loveとlikeの境界線はどこかに置いてきてしまったような。女版円堂、そんな四文字がよく似合う女の子。勿論、スーツでサッカーを楽しみズボンでドロドロに汚しても何も無かったかのように済ませてしまっ、そんなヤツだったのに。

雷門のベンチには、見慣れぬ影が一つ。つまらなそうに欠伸を漏らした塔子は、俺と目が合うと慌てて姿勢をびしっと真っ直ぐに直した。ボーダーの特徴的な帽子が、どこか物悲しく思えて。

「でも、もつたいないよなー。せっかく遊びに来たのに、サッカーできないなんて」

「少しは黙ったらどうだ、円堂。財前は足を痛めてるんだぞ？ 無理にさせたら、後に響く」

医者の子の貫禄と説得力は、並大抵のものではない。いつもはしぶとく抗議し続ける円堂も、豪炎寺の言葉を聞くとしようがないかと諦め、シュート練習を再開した。

怪我、か にはしては元気なような。別に塔子を疑っているわけではないが、らしくない。たとえポロポロになっても、いつ倒れるかわからない恐怖と直面してもフィールドを駆け回るあの背中を俺は、忘れた事が無い。

そうだ ああ試合の日も、そうだった。

(慰めの言葉でも掛けてやるか)

大好きなサッカーを見ていることしかできないんだから。そう思うと、少し可愛そうな気にもなってきた。次の休憩の時にでも、とぼんやり考えていたとき、ふと気付く。

(どうしてサッカーできないってわかってるのに、雷門に来たんだ？)

純粋な疑問が浮かび、答えを無意識に探るが、俺にわかるはずもなく。ベンチの日陰にゆったりと座り、マネージャー達とおしゃべりに華を咲かせている塔子が、少し羨ましく思えた。

「塔子、足、」

「え？」

「大丈夫か？」

かけるべきもつともな言葉は、残念な事に俺のボキャブラリーで見つけられず。唐突過ぎるとわかっていたが、ただ率直に言葉を放る。

「あ、ああ……ちょっと痛むだけだから、平気」

そう、か。ちらりと塔子の足元に視線をやる。今は隠れているため見えないが、黒いスーツの下にはきつと湿布が貼られているのだろ。じっと見続けていると、上のほうでプツと吹き出したような笑い声。人がせっかく心配してやっているのに。拗ねたように塔子を見ると、ごめんごめんと謝罪の言葉が舞い込んできた。それでも、

彼女が笑っている事に変わりはない。

「残念だな、久しぶりに会えたのに」

「うーん、そうなんだよなあ……パワーアップした”ザ・タワー”を見せてやりたかったよ」

「お前も頑張ってるんだよなー」

「あつたりまえじゃん！ だってサッカー、楽しいもん！」

最後の言葉が、ちくりと胸を刺す。俺は楽しさを求めていたはずなのに、結局『楽な道』へと逃げたのだから。女だから、なんていうハンデをもともせず突き進む塔子を、尊敬する。同時に尋ねたくなる。どうしてそんなに、強く在れるのかを。

「……本当はサッカー、したかったよ」

ぼつりと吐き出された言葉に、悪寒が走るほどの違和感を抱いてやりたいならやればいい、とか細いその腕を引けないことがもどかしい。

居心地の悪い沈黙に襲われる。そろそろ、戻ったほうがいいのか。そう思いつつ、円堂の方をちらりと見る。きっと俺の他にも、塔子と話したいヤツはいるはずだ。あまり独り占めしてはいけない。ふらりと立ち上がった瞬間、風丸、と塔子に名前を呼ばれた。びくりと跳ねる肩に動揺を隠せない。

「ホントは……ホントは、さ」

怪我なんて、してないんだ。

振向いた先の塔子は、ただじつと地面を見据え俯いていて。引っ叩かれたような、そんな衝撃に襲われる。が、すぐに冷静を演じ名前を呼ぶと、彼女はぼそぼそと語り始めた。

「ママに……、言われたんだ。もう、サッカーはやめなさいって。パパはあたしのこと庇ってくれたんだけど、あたし、ママに反抗できなかつた」

だつてママ、泣いたんだもん。

サッカーを好きでいるのは良いけど、もうやっちゃダメだつて。サッカーは貴方を傷つけるからつて。きつとママ、ボロボロになつて帰ってきたあたしのことを思い出して言つてると思うんだ。あたし、後悔なんてしてないのに。痛くなんてなかつたのに。サッカーを貶されたときのほうが、よっぽど一心臟>>ココ<<が痛んだのに。あたしの気持ちなんかママはわかってくれない。でもママはあたしのことを心配して、子供みたいに泣きじゃくるんだ。だからあたし、サッカー続けたいつて言えなかつた。代わりに、ごめんつて謝つた。謝つてから、もうサッカーやめるつて約束した。パパは、それでいいのか？ つて心配してくれた。いいよ、もう。そう答えただけどさ、やっぱり最後に一回だけ、雷門のサッカーを楽しみたくて。それで今日、こつそり抜け出してきたんだけど　ママのこと思い出したら、サッカーできなくなっちゃつた。あたしはただ、楽しいサッカーを護りたかつただけなのに、どうしてだろうね。あたしが弱いから、なのかな？

ちよっぴり寂しげに言葉の列を吐き出す塔子を、俺はただ黙つて見守る事しか出来なかつた。塔子の母親の気持ちはわかる。だつて彼女を傷つけたのは　他でも無いこの俺の、今まで褒められたことしかないこの足なんだから。でも、塔子の気持ちは痛いほどわかる。それは、塔子がどれだけサッカーを好きか知っているから。でも俺は

そんな彼女の想いを、踏みにじつたのだ。紫色のあの石に、全てを委ねて。

「あたしはどんどん変わってく。きつとこれからは、女の子らしくするように努力するし、サッカーのことも忘れる」

決意表明にも似た、その言葉の重みに耐えられなくなる。

だって、彼女を傷つけたのも俺で、大切なものを奪ったのも俺なのだから。全ては、俺のせいなのだ。塔子はわかっているはずなのに。なのに何故、俺を責めないのだろう。

「……だけど、風丸は、」

塔子の瞳は泣いていた。やっぱり、わかっているんだ。誰が一番悪いのかを。そして、無理に言葉を飲み込んでいるんだろう。ああ、でも。彼女は違うことを考えているのかもしれない。

「お願いだから、アンタだけは……」

誰が一番、悪いのか。間違ったのは、誰なのか。どこで道を踏み外したのか。狂ってしまったのは何故なのか。全て彼女は知っている。だけど、彼女は 財前塔子という人間は、

「今までと変わらず、笑ってて」

全てを許そうとしているのだ。悲しみと絶望を秘めたその瞳を細め、美しい笑顔を浮かべながら。俺の笑顔を優先してくれたのだ。大切なモノと引き換えに。どうして俺は、人を傷つける事しかできないのだろう。今だってほら、塔子は泣いている。

「……あ、りが、つとつ」

嗚咽と共に出てきた言葉は、掠れていて。滴る涙を唇で感じて、

初めて泣いていることに気付いた。俺は、本当に弱い。何もできないと悟ったときには、泣くことしかできないのだから。空はあの日と変わらず、輝いている。

(後書き)

……長いゼorz 初めてここまで長いを書きましたw
シリアス目指してレッツらゴーだったのですが、何かやっぱりダメ
な気がするw

また今度、他の話も書いてみたいです……って、こつこつ仕組みで
良いのかなぁ……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0111u/>

どうか貴方は変わらずに、【イナズマイレブン】

2011年11月16日21時47分発行